

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32645

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17581

研究課題名（和文）日本語版簡易子ども虐待ポテンシャル調査票の実用化に向けた検証

研究課題名（英文）Validity and reliability of the Brief Child Abuse Potential Inventory (BCAP) in Japan

研究代表者

田村 知子 (TAMURA, TOMOKO)

東京医科大学・医学部・教授

研究者番号：10352733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではMilner(1980)が開発した身体的虐待のリスクをスクリーニングする160項目の虐待ポテンシャル尺度とこれを基にOndersmanら（2005）が改良した34項目の簡易版の2つの尺度に注目した。日本国内の虐待予防の視点に立った「日本語版簡易子ども虐待ポテンシャル尺度（Brief Child Abuse Potential Inventory: BCAP）」の実用化に向けその評価と検証を目的とする。子どもを養育する前に虐待のスクリーニングを行うことは、予防的な介入を可能とする。そのため妊娠中、出産後の女性とそのパートナーの虐待リスクの経時的変化も検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの虐待死は生後4か月以内に多く、加害者の半数以上は実母である。つまり妊娠中、ひいては妊娠前からの虐待予防が重要である。現在「産後うつ」のスクリーニング尺度は広く使用されているが、虐待に特化した簡便なスクリーニング尺度はほとんど活用されていない。虐待のリスクを簡便にスクリーニングができる「日本語版簡易子ども虐待ポテンシャル尺度」は、妊娠中から出産後の虐待リスクをスクリーニングでき子どもが生まれる前の予防的視点で介入が可能となる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on two scales: the 160-item Abuse Potential Inventory developed by Milner (1980) to screen for the risk of physical abuse, and a 34-item simplified version developed by Ondersman et al. (2005) based on the original. The aim of this study is to evaluate and validate the Japanese version of the Brief Child Abuse Potential Inventory (BCAP) for practical use in Japan from the perspective of abuse prevention. Screening for abuse before raising a child allows for preventive intervention. Therefore, we also examined changes over time in the risk of abuse for women and their partners during pregnancy and after childbirth.

研究分野：生涯発達看護学関連

キーワード：子ども虐待 虐待スクリーニング 子ども虐待ポテンシャル尺度(CAP) 虐待予防 身体的虐待 マルトリートメント 不適切な養育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現在「産後うつ」のスクリーニング尺度は広く使用されているが、虐待に特化したスクリーニング尺度はほとんど活用されていない。本研究では Milner<sup>1)</sup>が開発した身体的虐待のリスクをスクリーニングする 160 項目の虐待ポテンシャル尺度とこれを基に Ondersman ら<sup>2)</sup>が改良した 34 項目の簡易版の 2 つの尺度に注目した。子ども虐待ポテンシャル調査票 (Child Abuse Potential Inventory; 以下 CAP) は信頼性、妥当性が検討され子ども虐待の 96% を判別すると言われている<sup>1)</sup>。虐待尺度と妥当性尺度 (虚偽尺度、ランダム回答尺度、矛盾尺度) から構成されており、「はい」「いいえ」によって回答する 160 項目の身体的子ども虐待のスクリーニング尺度である。

産後うつ状態スクリーニングの一つであるエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた先行研究では、産後 1 か月と産後 4 か月では産後 1 か月の方が得点は有意に高いことが分かっている<sup>3)</sup>。河村ら<sup>4)</sup>によれば 1 か月と 4 か月の間では産後うつとスクリーニングされる比率が 19.8% から 9.9% に半減する一方、虐待項目に回答する割合は 1 か月と 4 か月で変化しないことを指摘した。つまり虐待リスクは経時の変化を伴わない可能性がある。また、産後うつのスクリーニングだけでは、子ども虐待のリスク指標になり得ないことも示唆されている<sup>5)</sup>。そのため、よりよい産後ケアに向けて産後うつリスクと虐待リスクの経時の変化を明らかにする必要がある。

### 2. 研究の目的

日本国内の虐待予防の視点に立ち、妊娠前の男女を対象とし、妊娠前からのスクリーニングとして、最適なスクリーニング時期を検討する。また、「日本語版簡易子ども虐待ポテンシャル尺度 (Brief Child Abuse Potential Inventory: BCAP)」の実用化に向けその評価と検証を目的とする。

### 3. 研究の方法

#### 1) WEB 調査

第 1 段階として、0~17 歳の子どもを持つ 20~59 歳の男女 632 名に全国 WEB 調査による日本語版虐待ポテンシャル尺度を実施し、簡易版との比較検討を行った。

対象は 0~17 歳までの子を持つ 20 歳以上、60 歳未満の男女。居住地域の偏りを排除するよう居住地域は均等に抽出した。データ収集期間は 2019 年 2 月。WEB 調査機関経由で送信をもって同意とした。

質問項目は基本的属性と CAP160 項目とした。分析方法は JCAP 評点プログラム、JMPver.13 を用いて記述統計、属性によるロジスティック重回帰分析を行った。CAP の cut-off 値は 218 点とした。

#### 2) 縦断調査

WEB 調査の結果を参考に、妊娠中、産後 1 か月、産後 4 か月の 3 回、縦断的に調査を行い、CAP および EPDS を行い経時的な変化を明らかにした。対象は北海道 X 市、妊娠届を申請した妊婦とそのパートナー 899 名 (妊婦 453 名、パートナー 446 名)。妊娠中から産後 4 か月まで 3 回ともすべて返却があった者 277 名 (回収率 30.1%)。

配付期間は 2019 年 5 月~2020 年 2 月 (妊娠期)。産後 4 か月までの回収期間は 2020 年 12 月であった。277 名のうち、返却時期が遅いなど適切ではない者等を除外した。さらに「妥当性尺度」を用いていわゆる「でたために記載した例」と判定された 24 名を除外した 221 名 (男性 97 名、女性 124 名) を分析対象とした。

妊娠期 (妊娠届時) は対面で説明と同意を得たのち調査票を配布し郵送で返却とした。出産後 1 か月および出産後 4 か月は郵送で調査を行った。カップルの男女とも同時期に CAP を実施し、女性には同じタイミングで EPDS も実施した。

分析は JMPver13 を使用し、分析は JMPver13 を使用し、混合モデルにおける固定効果の F 検定、Tukey の HSD 検定を行った。

### 4. 研究成果

#### 1) 全国 WEB 調査

回答者は 632 名 (男女各 316 名)。うち、虐待尺度得点の妥当性が低いと想定される回答者 81 名は分析から除外し 551 名 (男 269 名、女 282 名) を分析対象とした。平均年齢 40.16 歳 ( $\pm 7.74$ )、同居の子の数の平均 1.82 名 ( $\pm 0.82$ )、平均点 150.16 点 ( $\pm 91.9$ )、218 点以上 117 名 (21.2%)、「既婚」の有無が虐待ポテンシャルに有意に関連した (オッズ比 2.97, CI: 1.27-6.97) (表 1)。

日本語版において、160 項目の CAP と 34 項目の BCAP の両者に強い相関が認められた ( $r=.90$ )、平均得点は 150.16 ( $\pm 92.0$ ) 点、また高得点者の割合は 21.2% であった。



表2. CAP得点 妊娠中～産後4か月の変化

	最小2乗平均	95%CI
妊娠中	87.3	78.7 - 95.9
産後1か月	85.4	76.3 - 94.7
産後4か月	84.7	75.3 - 94.1

混合モデルにおける固定効果のF検定、TukeyのHSD検定 N=221  
p=0.76

【女性】妊娠中85.7 (95%CI: 74.0 - 97.5)  
産後1か月 87.2 (95%CI: 74.6 - 99.8)  
産後4か月 83.6 (95%CI: 70.7 - 96.5) (p=0.77)  
【男性】妊娠中89.3 (95%CI: 76.6-102.0)  
産後1か月83.3 (95%CI: 69.7-96.9)  
産後4か月86.1 (95%CI: 72.2-100.0) (p=0.52)  
男女とも経時的な変化はない

2

### <文献>

- 1) Milner, J. S., & Ayoub, C. (1980). Evaluation of "At Risk" parents using the child abuse potential inventory. *Journal of Clinical Psychology*, 36(4), 945-948.
- 2) Ondersma, S. J., Chaffin, M. J., Mullins, S. M., & LeBreton, J. M. (2005). A brief form of the Child Abuse Potential Inventory: Development and validation. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 34(2), 301-311.
- 3) 松原直実, 堀田法子, 山口孝子 (2012). 育児期の母親の抑うつ状態に関する縦断的研究. *小児保健研究*, 71(6), 800-807.
- 4) 河村代志也, 高橋ゆきえ, 秋山剛ら (2005). 乳児の母親にみられる子ども虐待の可能性～3～4 カ月健康診査における日本語版子ども虐待ポテンシャル調査票 (JCAP) の使用経験～. *日本社会精神医学会雑誌*, 13(3), 116-128.
- 5) 山下洋, 吉田敬子 (2004). 自己記入式質問紙を活用した産後うつ病の母子訪問地域支援プログラムの検討 周産期精神医学の乳幼児虐待発生予防への寄与. *子どもの虐待とネグレクト*, 6(2), 218-231.
- 6) 河村代志也, 高橋ゆきえ, 秋山剛ら (2006). 新生児, 乳児の母親における子ども虐待の簡易スクリーニング～新生児訪問指導, 乳児健康診査におけるエジンバラ産後うつ病自己評価票 (EPDS) を利用した 11 項目調査票の使用経験～. *日本社会精神医学会雑誌*, 14(3), 221-229.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田村知子、久末智実
2. 発表標題 日本語版子ども虐待ポテンシャル調査票(CAP)による虐待リスク実態調査
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村知子
2. 発表標題 日本語版子ども虐待ポテンシャル調査票（CAP）の妊娠期から産後4か月における経時的変化
3. 学会等名 第22回日本ウーマンズヘルス学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------